

「遊女柳橋扇面流図屏風」(島根県立石見美術館蔵)と「柳橋水車図」

児玉絵里子(文化学園大学文化ファッション研究機構)

本発表は、従来明らかにされていない寛永後期～明暦(一六二四年～五八年)頃「遊女柳橋扇面流図屏風」(島根県立石見美術館蔵)の画題について、考察するものである。

遊女柳橋扇面流図屏風は、慶長年間に定型が成立した柳橋水車図屏風の亜型と位置づけられ、その画題については従来、次の指摘が行われている。「定型成立以後の柳橋水車図屏風類品」、且つ「定型の構図やモチーフを別種の主題に転用する作例」で、「一世を風靡したあの柳橋水車図の意匠を取り入れ当世風の美人図と組み合わせていることこそ、本図の趣向であり奥行となっている。」(竹内美砂子 1990)。「柳橋水車図、扇面流図、遊楽図、鯉魚図など、複数の画題を組み合わせた不思議な作品。」(帯刀菜緒 2013)。遊女柳橋扇面流図屏風は、明確な主題が明らかとされずにきたのである。

本研究により遊女柳橋扇面流図屏風に、次の画意を読み解けることが明らかとなった。絵師が屏風絵に込めた「物語」解明の糸口は、従来看過されてきた画中扇絵の意匠にあった。各々の扇絵に描かれた題材は、何を描くものか。この問いをひとつずつ辿れば、扇絵が橋上の女性の姿に重なる表象と分かる。本発表で、解明された物語の内容を明らかにしたい。

物語の始まりは、①第五扇の扇絵『平家物語』「扇の的」の一場である。那須与一が矢を放つ場面、扇絵の中に射抜かれた扇は描かれない。扇は扇絵の画面から飛び出し、空を舞って鯉の隣に落ちる、すなわち「恋に落ちる」。第四扇②牡丹尾長鳥と松、つまり吉祥の意を帯びるハレの意匠に続き、第三扇③やまと絵の扇絵『堤中納言物語』「貝合」の場面である。その心は欄干の女性の恋の思い、想い人との出会いを「蔵人の少将」に見立てるものである。③下、物語の情景を想起させる扇絵④は三重塔か、都の遠景を望む霞がかった風景図が添えられる。次に、第二扇⑤中国の故事「泥中の蓮」である。これは橋上の遊女の清い心を表象する。第五扇絵扇①、与一が絵の中で射抜いた扇の軌道のように、第一扇「鯉」の隣に白波を立てて落ちる扇絵には「鳶」が描かれる。「駿河なる宇津の山辺のうつゝにも夢にも人に逢わぬなりけり」(在原業平)である。第六扇橋上の女性は手を翳し遠く(扇)を眺め、鳶、すなわち「来ぬ人」を待つ。入れ子のように巧みに編みこまれた、美しい心象と物語が描き出される。遊女柳橋扇面流図屏風に描かれた扇絵はおそらく、橋上の女性(遊女)の心を現わしていた。

そして屏風絵中の絵扇に注目すれば、虚空に軌跡を描く絵扇の、扇の骨と地紙の様はあたかも“水車の車輪”の図像に重なる。左の親骨で白波を立て出た扇(与一)は、くるくると廻り、右の親骨から白波を立てて水に突っ込む(鳶)。まるで巨大な水車が水から出て水に沈むように描かれている。的の「扇」は、橋・柳・水車(扇)に姿を変え「柳橋水車図」となり、屏風絵に込められていたのである。